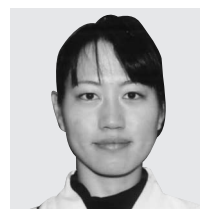


## 「和の心・弓道」



山本 愛弓さん  
(英米語学科4年次生)



吉海 光さん

(ドイツ語学科4年次生)

京都外大の弓道部は、小笠原流の弓道の流派です。私達がまず弓道部に入ったら弓を使う前に基本的な型をゴム弓で覚えます。それが射法八節という型です。打起しから引分け、口の高さまで矢を下ろし、矢を離すまでの所作です。矢が離れたあとも、残心といって、自分の心をじっくり落ち着けさせるところに和の心があるのではないかと思います。練習で使う的は、自分たちで作ります。初めは、矢を使わないで、弓を使って素引きを何度もします。次に、巻藁を使って練習します。最後に的にかかります。学生が競技で使う的は、星的で、審査や行事で使う的は、霞的を使います。

今までに私達が入部してから、留学生が何人か入部してくださいました。1人は、スイス人で、今もスイスに帰って弓道を続けておられます。もう1人はこの春から半年間おられたオランダ人です。留学生は、毎年たくさん弓道部の活動を見に来られます。

英語で書かれた弓道の教本が出版されていて、アジア図書館で英語で書かれた教本を見つけました。私達が留学生に教えていて、伝わらなかった事がこの教本を読んでわかってもらえるのでとても役に立ちます。

## 「袴で語る日本の歴史」



谷 瑞紀さん  
(フランス語学科3年次生)



コールマン・ラシュントンさん  
(留学生別科、出身地・アメリカ)

剣道は、現在日本国内にとどまらず、世界中で行われています。剣道着は胴着と袴に分かれています。胴着は、かつて野良作業をするときの作業着でした。袴は、様々な種類があり歴史や用途共に変化してきました。とりわけ袴に注目してお話していきます。剣道で履く袴は、襠(まち)あり袴という種類です。真中に襠があり、左右それぞれに足を入れるという構造です。かつて武士が馬に乗っていたことからこの形が名残として残っています。武家の子どもは5歳になると「袴着」という儀式があり「武門入り」を意味しました。裾広がりや形状と5本のひだによって作られる中の部分の構造が打撃の衝撃を緩める効果があります。袴の全面には5本のひだがありますが、これは儒教でいう「五倫・五常」をあらわしていると言われています。「五倫・五常」は、儒教で人として守るべき五つの道(徳)を指します。また剣道では、腰板が付いていますが、後ろ腰や背中を中心とした身体意識の養成も容易になるかと思われます。

明治の頃から女性が外で働きだしました。それまでは、「働く」=「男性」でしたから、その男性的な要素である袴が女性の仕事着に採用されて、今では学生生活を終えて社会へ出て行く節目である大学の卒業式で袴がよく着用されています。

剣道で袴をはくときは、「前下がり、後上がり」にはくことが定着してきました。実践のために短くはくという考え方もあるようです。このように剣道の袴は、安全性、象徴性を兼ね備えた日本が残した伝統的な衣服なのです。

## 〈実演〉

### 杖道

スヴェン・ケーリンさん  
(留学生別科、出身地・スイス)



### 居合道

加藤 麻弥さん  
(豊剣会)

